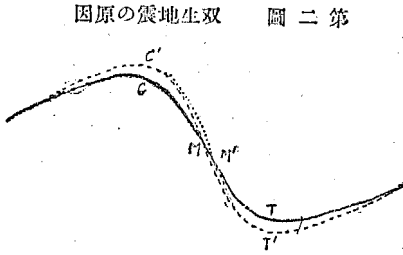


地震の二二回に比すると相似である。

双生地震の原因

以上述べ來つた如く二種類の双生地震は類似點ありとするも全然同一の性質といふことは出来ない。第一種に屬する同動地帯を有する地震は二つの異なる震原からの震波のために起るものであり、第二回目の震波は第一回目の震原と同一でないものである。しかし、兩者が僅々二三秒といふ短時間の隔を



有するので双方に深い關係のあることは考へられる。今第二圖のCMTを褶曲の一部分とし、この褶曲が僅少の度を増してC'M'T'の形となつたとする。C'Tに於ては恰もMを中心として同轉運動の行はれたことになり、二つの震原C'T'が中心Mの兩側に生ずる。勿論、褶曲の進行につれてMがM'に移動することはあり得るのである

位置、例へば褶曲の峯と峯の部にあつて、第一回目と第二回目との震波に衝突を生じない程度に隔つて地震が起るものである。

然らば何故に或る場合には第一種の地震となり、或る場合には第二種の地震となるか。これは褶曲の進行の場合に褶曲の谷は深さを増すに困難な事情の存する場合があり得るためかと思はれる。褶曲の進行につれて順次に起つたものと考へられる地震は中部英國では一七五〇年のノーザムプトン双生地震、一八九三年のライセスター地震、一九〇三、一九〇四、一九〇六年のデルビー地震、一九一六年のスタツフォード地震を舉げることが出来る。

以上は双生地震の大要であつて、著者は更に震原、震波及震波の地表に於ける傳播の影響等について記述してゐる。

新著紹介

○地質學提要

佐藤傳藏著 菊版三九二頁索引一四頁

昭和三年一月 東京神田區表神保町中興館書店發行
定價金三圓七十錢

從來邦文地質學一般の著書として世に廣く行はれてゐるのは横山博士の地質學攬要と森下氏の地質論通論の二であつたがこゝに最近の學說を取り入れた佐藤東京高師教授の新著が公にされて地學愛好者に執つては如何ばかりの利益と幸福とであるか知れない。本書は著者の東京高等師範學校に於ける講義の草稿を整理されたもので、篇を別つこと六、即ち緒論地相論、岩石論、動力地質論、構造地質論、地史等の六篇である。從來の地質學書の行き方を踏襲してゐるのは學習者に

とつて便利である。今其の内容の一般を窺ふに其體裁は序文にある様に前半はゲーキーの名著に、後半の地史の部分はカイセルの好著に倣つて居、殊に地史の大部分はそれを摘萃したものである。かく體裁は上記の兩著によつたものの、内容に至つては大に異なつて、殊に新説を詳細に紹介した點が著しい。大陸移動説に二十數頁を費してゐるのは其の一例であり地史の部に於ても日本、支那等の記事を澤山に入れ、日本の重要な化石の圖版を入れたのは他の一例である。たゞ岩石論は別に同じ著者の岩石地質學が既刊されてゐる爲めに要約を説いてゐるに過ぎない。之を翻讀して氣付いた點を二三述べると日本の著書としては誤植が少ないものとそれでもまだかなり多く恐く百以上の誤植がある様である。著者は我國に於ける地質學の著書である反映として實例の豊富なものには驚くべきものがあるのも美點の一つである。他の日本の地質學の著書に於ける様に數量を擧げたものにあやしげなものがある一般地質學に對しては新説を説明する所が多いのに反して地史の部はカイセルの著書によつたが爲めに近代の地史學に於ける帶化の重要さや各系に於ける帶に就いて——それは皆までは無論分量に於て容さないとでも中生代の或る系に於て例を示されたなら近代の地史學の趨勢が判ることだらう——記述されてないのは遺憾である。附圖として五百萬分一日本地質圖があつて甚だ便利ではあるがこれも古い二百萬分一地質圖に依つた爲め新しい調査が取り入れられてないのは折角の製圖努力の効果を半減するものである。何かと瑕瑾を云爲

したものの本書は稀に觀る凝結された地質學の參考書であつて、獨り地理及礦物の文檢受驗者の必讀すべき良書であるばかりでなく高等學校、高等專門學校及師範專攻科の教科書として推薦すべく、猶且つ一般の地學に興味を有する人士に熟讀を奨めたき地質學書である。(N)

○地と其の律動

シニカート及ルヴェン共著

(The Earth and its Rhythms. By Charles Schuchert and Clara M. LeYen. 1927. D. Appleton & Co.) 大四

六版 四一〇頁 定價四弗。

近來アメリカ合衆國には數多くの平易にして興味を湧かせる地質學書が頻りに公にされるのは、地質學が石の様に堅くて、一般人士の頭に這入り惡く様に想はれてゐる我國から見て羨ましい至りである。殊に本書の著者の一人の様なエール大學の名譽教授が努力して一般知識階級に對し地質學は他の多くの科學を首尾一貫した全知識に組み上げるものであることを訓へるのは文化の上進に貢獻する所が少なくないものである。本書の題名は恐らく同じエール大學の地質教授にして夭折した鬼才ジョセフ・パレルの「自然は律動す」といつた言葉によつたものであらう。この自然の規矩ある顫動を地質學の上から、古今に通じて科學的に語つたものである。章を分つ三十一、地質學のあらゆる部門に亘つて明解な説明を加へてゐるが、地文顯象を説く所甚だ多く、例へば第五章のハドソン及ミスシッピ河系の如き地理の記述として甚だ優れ

内田寛一著 昭和三年一月發行

地質學者の隨筆ものとして、こゝに内田學士の山のこなた
が出現した。四六版三七六頁美はしいコロタイプ八葉。思ひ
出の章には著者の若い日、唐津中學校で出逢つた、日本海々

篇華人の日本觀といふのは面白く觀察がある、南洋や滿蒙に著者が旅行して見た所、感じた所、いかにも流暢にしるしてあつて、一讀巻を終るまでこの書を放さしめぬ所に、著者の常識の豊富をなしめてゐる。多くは東洋時報とか、日本教育とか補習教育とかいふ雜誌に掲載されたものである。著者の才筆を知らんとする人士に一本をすゝめる。(藤川)

本書は天理教傳長山中正善氏の著述である、著者が大阪高等學校を卒業した大正十五年に、朝鮮から滿洲支那を旅行して見聞した所を録し、教徒や知友に配つたものであゝ。菊版二三二頁寫眞も豊富にあつて誠に氣のきいた手頃の本である。深刻な觀察があるといふわけではないが、極めて眞面目に東方亞細亞を理解せんと努力した跡が著しく目につくのが何よりうれしいことと思ふ。(藤田)

本報は自然地理、都市地理、經濟地理の三項に類別して十七篇を蒐集し、二八四頁になつてゐる。研究としては徳島地溝帯の地形學的考察(吉田巖、櫻の開花等日線(富田芳郎)であるが廣島市(西總正夫、岡山市(浦上宗衛)、前橋市(關本辰資)、石油(川口丈夫)をはじめ和田氏の輪島塗、小倉氏の郡内織物などいづれも面白く讀んだ。第一輯以後の總目錄が附いてゐる。

(藤田)

能登の輪島町では大正十四年度に支那漆三十七

萬八百圓日本産漆十萬二千五百圓を消費した。近年日本産の漆が減少するので産額不振であるが、能登の風至、岩手縣南部、信州、加賀、飛騨等から猶多少を産して、この地に送